



株式会社 sasaki factory
代表取締役

佐々木 将史

27歳の時、塗装業で独立を果たした佐々木社長だが、2年目で大きなピンチを迎えた。リーマン・ショックの煽りを受け、不安定な状況が1～2カ月続いたという。それまでは現場の応援に行くことが中心だったが、自身で顧客開拓に着手。結果的に自社の顧客を多数獲得することにつながり、見事ピンチをチャンスに変えた。「仕事がない苦しい経験をしたからこそ、今は仕事があることがありがたい」と語る社長。どんなに小さな仕事も断らず、一つひとつの現場を大切に真正面から向き合っている。

(対談記事は70～71頁に掲載)

**「どんな現場でも真摯に向き合い、
人とのつながりを大事にしていきたい」**



一つひとつの現場、人とのつながりを大切に 常に全力投球を続ける塗装の匠

『sasaki factory』は千葉に拠点を構えて、塗装業を手掛ける企業。個人事業を経て、2021年10月に法人設立を果たした。同社を率いる佐々木社長は自身の腕一本で事業を支えてきたが、法人化を機に人材の確保と育成にも取り組んでいきたいと意気込む。本日はフリーアナウンサーの辻よしなり氏が、社長と奥様の美保さんのもとを訪れ、独立までの歩みから、事業にかける想い、今後の展望など様々なお話を伺った。

——早速ですが、佐々木社長のこれまでの歩みから。ご出身はどちらですか。

(将) 山形で生まれ、東京で育ちました。サッカーに打ち込む少年時代を過ごし、Jリーガーを目指していた時期もあったんです。高校までサッカーを続けましたが、現実はその甘くなくプロになることを断念。けれども、礼儀礼節や上下関係、チームワークなどサッカーを通して多くのことを学びました。この貴重な経験は今に活かしていると思いますね。

——スポーツの力は偉大ですね。では学業を終えられてからはどのような道に進まれたのでしょうか。

(将) 建築関係の仕事などを転々として

いました。最初はオフィスのパーティションを作る内装関係で、その次は鷹職。その後、現在手掛けている塗装業に入ったんです。当時は19歳でしたね。

——様々なお仕事を経て、塗装業に出会われたのですね。現在まで塗装業を続けておられるということは、社長にとっては天職だったのでしょうか。独立のきっかけとは何だったのでしょうか。

(将) 3社で経験を蓄積したのですが、前勤務先では会社の方針と相容れなくなり、退職することを決意。「自分の手で理想の会社をつくらう」と一念発起し、27歳で独立したんです。

——男気がありますね。その当時、ご結婚はされていたのでしょうか。

(美) していました。長男が1歳になる前でした。主人から「会社を辞めて独立する」と聞いて、最初は不安しかなかったですね(苦笑)。

——社長ご自身としては、こういった心境だったのでしょうか。豊富なキャリアと確かな腕もあるし、やっていけると？

(将) 自信があったというよりも、「やるしかない」という思いだけでした。元々物事を深く突き詰めるタイプではないので、スタートしてしまえば何とかなるだろうと(笑)。

(美) それ以前からずっとサラリーマン



株式会社
sasaki factory

千葉県習志野市屋敷 1-13-11-1

sasakifactory

はできないと言っていましたし、主人を見ていて私もそうだろうと思っていたので背中を押そうと考えました。

——奥様の後押しを受けてスタートされた。立ち上げ当初はいかがでしたか。
(将) 前勤務先の社長が独立祝いのような感じで任せてくださった仕事が最初でした。今でもその現場のことは鮮明に覚えています。辞めた人間にそこまでしていただいて、本当にありがたかったですね。立ち上げ当初は資金もありませんし、30万円ぐらいのボロボロの中古の車を買ってスタートしたんです。その後ハイエースの新車を購入し、そのころからやっと、「独立したんだ」という意識も芽生えてきました。そこから徐々にステップアップして行くことができたのですが、常に無理することなくマイペースでしたね。

(美) 2年目ぐらいでリーマン・ショックがあり、1~2カ月ぐらい全く仕事がないことがありました。ちょうど次男を妊娠していた時で、不安でした。仕事を待っていても仕方ないので、パソコンでチラシを作って配り歩きました。

——大変な時期もあったようですが、奥様が公私共に社長を支えてくださったのですね。

(将) はい。本当に感謝しています。大変な思いもしましたが、そこからようやく自分のお客様を持てるようになったんです。それまでは先輩の塗装屋さんの手伝いばかりで、せっかく独立したのにこのままで良いのかと思っていて。これなら勤めていた時のほうが良かったと感じていました。そこにリーマン・ショックが追い打ちをかけ、どん底も味わいましたが、自分でお客様を開拓することもでき、基盤を築くことができました。

——仕事がない時期を経験すると、仕事の重みがまた違ってきますよね。

(将) そうですね。一つひとつの現場がそれまで以上に大切になりました。今はどんなに小さな仕事でも断りませんし、規模の大小を問わずに全力を尽くしています。たとえ利益の少ない仕事でも次につながることもありますし、ご紹介いただけることもありますからね。利益を追うのではなく、人とのつながりを大事にしていけたらと思っています。

——ところで、法人にされたのは、何か理由があるのでしょうか。

(将) 個人事業で創業してから14年ぐらいになりますが、5年ほど前から法人化を考えるようになりました。ただ自分の中では、なかなか一歩を踏み出せずにいたんです。その中で昨年、大きな現場を手掛けることになり、良い機会だと思って法人化を決断しました。仕事の幅もさらに広げていけたらと、ホームページも作成しているところです。

——現在、従業員さんは何名いらっしゃるのでしょうか。

(将) 基本的には私1人ですが、同業の仲間数人に助けてもらっています。ただ、これからは自社で人材を確保して、若い人を育てていきたいですね。

——今後が楽しみです。最後になりますが、将来の夢をお聞かせください。



代表取締役

佐々木 将史



奥様

佐々木 美保

(将) 規模を大きくすれば良いとは考えていません。目が届く範囲の少数精鋭にして、皆で仕事も遊びも一緒に楽しみながらやっていけたらと思っています。

——本日はありがとうございます！

(2022年5月取材)



フリーアナウンサー
辻よしなり

「どんな仕事も断らないことをモットーとされている佐々木社長。私自身もせっかく自分を選んでくれたんだからと、その期待にお応えできるように何でもさせていただくことを信条にしているので、大いに共感できました。皆が断るような仕事でも、長い目で見ればすごいところにつながる可能性もありますしね。これからもお互いに頑張りましょう！」
辻よしなり・談

夫婦二人三脚で歩む

▼共通の知り合いを通じて出会ったという佐々木社長夫妻。14年前に独立を果たしてからは大変な時期もあったというが、夫婦で協力しながら乗り越えてきた。「子育てに忙しい時でもあったので、支えてきたという意識はあまりありません。創業当時はまだ子どもが小さかったので、何とかしないという気持ちはありましたね」と振り返る奥様の美保さん。

▼釣りやサーフィン、ドライブなど多趣味な社長は、「独立して一番変わったのは趣味が楽しめる時間ができたこと」だと語る。しかし一方の美保さんは、「仕事がない時期、子どもを育てるにもお金がなくて必死だったのですが、「明日釣りに行くから」って勝手に予約してくるんですよ。それでよく喧嘩になりました」。ただ、「つらいのは私だけじゃありませんし、外で発散することも必要だと思いますから」と語った。理解ある奥様の支えを受け、感謝の気持ちを持って日々仕事にプライベートに尽力する社長。子育てが一段落したら、ぜひ夫婦二人の時間も楽しんでほしい。